

✧ 研究会報告 ✧

「近現代日本の宿〈ヤド〉の体系化に関する研究」第1回研究会

「宿」研究の可能性

日時：2022年6月25日（土）15:00～17:00

場所：対面+Zoomのハイフレックス開催

（みなとみらいキャンパス15032教室よりオンライン配信）

川島 秀一（東北大学災害科学国際研究所 シニア研究員）

「清光館哀史」をめぐって

民俗調査を目的とする旅する民俗学者にとって、その泊まる「宿」については、一夜の雨露を凌ぐための手段にすぎなかった。宿泊することによって、その地域の情報を得たり、食文化に触れる場合もあるが、あらためて自身の宿を対象化することは少なかった。たとえば、柳田国男は大正9年（1920）の東北の旅で、飯野川（現石巻市北上町）の宿に老按摩を呼び出し、オカミサンと呼ばれる巫女のことを、彼から情報を得ようとしている^{注1}。しかし、同年の岩手県の子内（現洋野町）の旅から6年後の大正15年（1926）、再び当地を訪れて書かれたのが「清光館哀史」である^{注2}。はからずも「宿」が対象化された名品が生まれたわけである（写真1）。この文章の中で、柳田は自身のことを「通りすがりの一夜の旅の者」と述べているが、その言葉を、川田順造は「柳田国男の民俗探訪の特徴」と捉え、次のように展開している。

「長期に対象社会に住み込み、そこの人たちと生活を共にしていれば、大部分は修正されたり否定されたりする旅の第一印象を、文献に基づく博大な参考知識と、何よりも詩人としての感情移入の見事さによって、

それなりの整合性をもった紀行文の形として表現してしまうとき、見る側の表現と、もっとどろどろした、あるいはあっけらかんとした、対象社会の現実とのあいだに口を開けているはずの深淵は、放置されたままになる」^{注3}

このことは対象としての「宿」に限られることではないが、その「深淵」を埋める作業は「宿」の研究においても、まだ残されているのではないだろうか。「一夜の旅の者」とは、必ずどこかに宿泊している者をも指しているが、宿泊される側からの民俗研究は、いたって多くはないからである。

宿泊業者側からの研究

たとえば、宮本常一に『日本の宿』（1965）という著書がある。社会思想社の教養文庫版のほかに、近畿日本ツーリスト株式会社と同社の協定旅館連盟が編纂者として宮本と連名で出版された『にっぽんのやど』が、内容も発行所も発行年月日も同じに上梓されている^{注4}。本書は、「若者宿」など、それまで民俗学が対象としてきた宿にも触れられているが、どちらかといえば「宿」の歴史的記述であり、戦後の記述が不十分であるが、「湯の宿」などの章が目新しい。しかし「旅のしかた」の章など、主に旅する者の視点から描かれている。

宿泊業者の側からの文献となると、最近まで、研究書よりも小説の中で扱われていることが多かった。とくに井伏鱒二の『駅前旅館』（1957）は、井伏の他作品の『黒い雨』（1966）が広島原爆投下時の日常性に基づいて扱い、『多甚古村』（1939）が日中戦争下の駐在日記を土台にしていると同様に、旅館業の日常性と実証性を表しているように思われる。この作品中に出てくる「駅前の宿屋風景を知りたい。思い浮かぶままに語ってくれ。くだらないと思ったことでも喋ってくれ。何も彼も繕わずに話してくれ。芝居や小説のように仕組みなくてもいい。在りのままに話してくれ」という言葉^{注5}は、そのまま井伏の取材方法につながり、今後の「宿」研究の基本的な姿勢になりそうである。

この『駅前旅館』は、東京の上野駅前の旅館という設



写真1 「清光館」のあったところ。記念碑も建っている（岩手県洋野町の小子内、2012.8.17）

たとえば、宮城県気仙沼市の魚問屋は、「外来船」と呼ばれる他県籍の漁船の水揚げや仕込みの世話をするだけでなく、船頭を風呂に入れたり、酒を飲ませたり、しまいには宿を提供したという^{注11}。その中から宿泊業専門に転じる者もいた（写真5）。また、福島県新地町の釣師浜で、東日本大震災まで営業していた「朝日館」という旅館の明治の頃の前身は、網元であり酒屋であり、風呂屋であり下駄屋であった。風呂に入り酒を飲んで泊まっていく者が多くなったので「旅館業」も始めた。専門になってからも、単に泊めるだけでなく、部屋を提供する役割もあり、かつては業者の談合や祝い事の後のバック宿としても利用されたという^{注12}。「宿」が社会の裏面史を映し出していることが多いのも、注意される点である（写真6）。



写真6 震災前の道筋に立つ「朝日館」（相馬双葉漁協新地支所提供）

さらに、常設されていない対象をヤドと呼ぶ事象も多い。島根県の浜田から対馬へ出稼ぎがあった昭和時代には、到着してから何度かの操業のあと、受け入れる対馬の各戸で「宿入り」という歓迎の宴が開かれたという^{注13}。千葉県では九十九里浜や鴨川から大原に網船が回ってきてイワシを水揚げする場所を「宿」と呼んだ^{注14}。嫁入り行列に儀礼的に休憩する場所も「中宿」と呼ばれていた^{注15}。

日本語の「宿る」という言葉には、「神が宿る」、「子が宿る」というように、何かがそこに到来して生まれるという意味も含んでいる。神輿の巡業時に休止する所のヤドや、契約講などの輪番のヤド、そして「若者宿」にさえ「籠り」の要素があった。「宿」における創造性や再生の意味、あるいは現代の観光業のコピーに使用されがちな「心の洗濯」やりフレッシュの言葉の意味も含め、「宿」を日本の文化史の中に位置づける研究は端緒をついたばかりである。

- 注 1 柳田国男「豆手帖から」『雪国の春』（角川学芸出版、2011、初版は1928年に岡書院より出版）132 p
 2 柳田国男「清光館哀史」『文藝春秋』（1926）
 3 川田順造「旅人の目がとらえるもの—柳田国男「清光館哀史」を問い直す—」『人類学的認識論のために』（岩波書店、2004）365 p
 4 田村善次郎の解説による。（宮本常一『日本の宿』、八坂書房版、2009）283 p
 5 井伏鱒二「駅前旅館」（新潮文庫、2007）172 p
 6 注5と同じ。105～106 p
 7 注5と同じ。153 p
 8 注5と同じ。144 p
 9 池内紀「駅前旅館」解説（注5と同じ）218 p
 10 たとえば、宮本常一『村の若者たち』（家の光協会、1963）、瀬川清子『若者と娘をめぐる民俗』（未来社、1972）、中野泰『近代日本の青年宿—年齢と競争原理の民俗—』（吉川弘文館、2005）などの業績がある。
 11 2021年12月12日、宮城県気仙沼市の魚問屋「齊吉」の齋藤貞子さん（昭和12年生まれ）より聞き書。
 12 2022年10月10日、福島県新地町にあった「朝日館」の元おかみ、村上美保子さん（昭和24年生まれ）より聞き書。
 13 林勘次郎「瓦片録」（1952年写本、神奈川大学日本常民文化研究所蔵）291 p
 14 川口祐二『光る海、渚の暮らし』（ドメス出版、2004）39 p
 15 柳田国男『婚姻の話』（岩波文庫、2017、初版は1948年に岩波書店より出版）169 p、297 p

注記：研究会では「宿」遍歴の半世紀—下宿から遍路宿まで」という題で発表した。